

研究成果報告書

2022年 8月 25日

1. 所属・職・氏名 等

文学部国文学科・専任講師・吉田恵理

2. 研究課題（テーマ）名

近現代日本語詩と民衆／大衆文化としての「歌」

3. 研究期間

2021年4月1日～2022年3月31日

4. 利用した研究費の種類及び金額

「若手教員研究促進交付金（合算分を含む）」 合計 579,680 円

5. 研究の概要

これまで近現代詩研究は詩壇の中央にあった近代詩人を中心に行われてきたが、文化としての日本詩は、小説との境界を跨ぎあるいは攪乱するような散文詩や長篇叙事詩といった新たな形式の試み、また大正期の童謡運動や戦後のポピュラー・ソング、あるいは大衆文化の中のマイナー・カルチャーとしての日本語ラップなど、歌の文化を隣接領域として形成されてきたのであり、その多くは社会や既存の文化に対するプロテストの意義を有していた。こうした詩ジャンルの裾野の広さに注目し、そこでどのような日本語詩の表現が生まれてきたのかを検討することによって、小説史を中心とする既存の近代文学史を相対化する契機としたい。

6. 研究成果等

当該年度の研究成果を「7」の実績に関連づけて報告する。

- ①2010年代に入って積み重ねられている「国民詩人」北原白秋の功罪をめぐる研究資料を整理し、中原中也の詩論における白秋の〈童心〉との類縁性と質的な差異および白秋『思ひ出』をプレテクストとする詩篇「雪の宵」のパロディ性について考察した。
- ②第二次世界大戦前夜の1930年代の民衆詩の可能性を探って、小熊秀雄の長篇叙事詩に関連する同時代資料と先行研究および関連資料を調査・収集し、テキスト分析によって小説との境界を跨ぎあるいは攪乱するような長篇叙事詩という新たな形式の試みの歴史的な位置づけを行った。
- ③2011年の東日本大震災後に刊行された辺見庸の詩集『眼の海』収録の長篇散文詩「赤い入江」について、東北復興の歴史の検証抜きに行われた復興事業や自然や死者をタブー視して此岸と分断する文化的対処法への批判を行ってきた歴史学との接点を探りつつ、特定地域

のローカルな風景を喚起する表象としての〈入江〉の文脈を考察した。

④大衆文化としての詩がどのような媒体で他ジャンルと関わり、どのような読者層に受容されたのかを考察することを目的として、1970年代に創刊された『詩とサンリオ』を対象とする共同研究に参加し、同時代の詩の状況について調査報告した。

当該年度は新型コロナウイルス感染症の影響で調査のための出張は行うことができなかったため各費目に関する当初の計画に変更を生じ、上記の原稿および口頭発表に必要な備品・消耗品・参考文献等を購入した。また、備品として購入予定であったプリンタ等のPC周辺機器を安価なものにしたため消耗品として支出した。

7. 研究の実績（論文・発表 等）

①【論文】「白秋をまねる中也「雪の宵」再考」『中原中也研究』2021年8月

②【論文】「働き歌と抗争のリズム——小熊秀雄の〈饒舌〉と「韻文精神」」『昭和文学研究』2021年9月

③【論文】「〈入江〉の記憶—辺見庸「赤い入江」」『国文学論考』2021年3月

④【口頭発表】「『詩とメルヘン』同時代の詩の状況—1970年代を中心に」、サンリオ文化と文学研究会、2022年3月27日オンライン開催